

陸生ホタル研

No.142

2025 年 5 月 7 日

陸生ホタル生態研究会

電話：F X 042-663-5130

Em:rikuseihotaru.07@jasmine.ocn.ne.jp

フィールドからの証言 34

絶滅したのか板当沢林道の陸生ホタル

小俣 軍平

1 はじめに

2019 年の台風 19 号（以下、本報告では「台風 19 号」と呼びます）の大災害に見舞われた板当沢林道について、今まで 3 回にわたって報告してきましたが、早くも 6 年の歳月が流れました。板当沢の陸生ホタルはその後どうなったのか。今年は、休眠明けの幼虫が蛹化を前に発光しながら採餌を開始する 5 月はじめの時期を狙って、観察を試みました。

2 調査地の概況

全長 1800m の板当沢林道の様子は、台風 19 号による被害に関してのみ述べるならば、下流部の 900m は見たところではまったく無傷で、上流部の 900m が酷く被災した状況でした。そのため今回の調査は、下流部の 900m のみについて行いました。（なお自然環境の記録写真は、調査後に再撮影したものです。）

1：図 奥に見えるのが林道中間点にあるゲートで、ここで流路と林道の落差が一気に縮まり 2m 程になります。ここより上流部には台風 19 号による被災の跡が見られますが、手前は以前の姿そのままです。左側の路肩にはクロマドボタルが、右側の草むらにはかつて苔むした廃材がおかれていてカミキリムシの穴の中にオオオバボタル幼虫が暮らしていました。



- 2：図 1：図からカメラを 180 度振って見たところです。左手の小さな白い掲示板の手前に橋があります。
樹木が成長して大きくなったこと以外は、以前のままの姿です。



- 3：図 2：図の白い掲示板の所から 800m地点を撮影したものです。



- 4：図 3：図の右側、杉の大木が立っている所の山側の状況です。被災する前はクロマド・オバ・ムネクリ・カタモンの4種が路肩で豊かに暮らしていました。



- 5：図 800m 地点から 700m 地点を見た図です。ここでは山側だけでなく谷側の落葉樹にも、複数のクロマド幼虫が連日登って発光していました。小型の昆虫を捕食するために、樹高 10m ほどの高さで何匹も発光している姿は壮観でした。



6：図 5：図の右側の樹木の上部。ここもクロマド幼虫が発光していた所です。



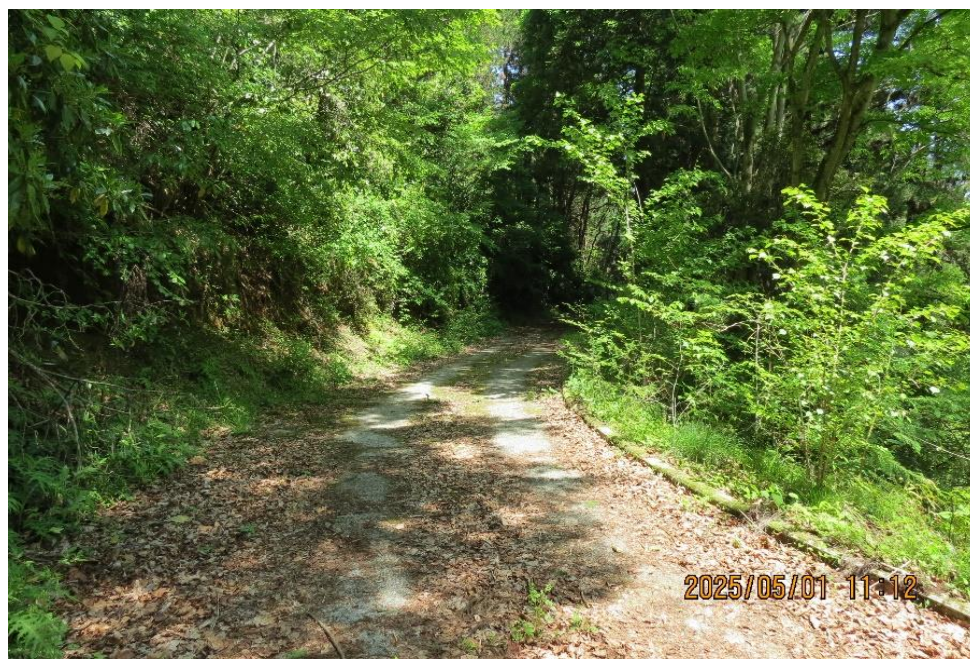
7：図 5：図の山側の状況です。



8：図 750m 地点。矢印の樹木には夜間にクロマドがよく登って光っていました。



9：図 650m 地点。谷側の斜面が谷底迄 50m あり、板当沢時代に地滑りが何度も起きた場所です。そのため山側にもホタルの幼虫はいませんでした。



10：図 9：図の山側の状況



11：図 650m 地点から 600m 地点を見たところ。黄色い円は、板当沢時代にオバボタルの幼虫の休眠明けから蛹化までの過程を、連日 20 日間程通って観察・記録した場所です。見た目の様子は当時そのままです。



12：図 600m 地点から 500m 地点を見たところ。ここも大きな変化の跡は見られません。台風 19 号による激流が襲ったのは、右側の杉木立の下 20 m 程の所です。



13：図 12：図の山側路肩の状況。変化は見られません。板当沢林道の陸生ホタルの幼虫たちは、カタモンミナミとクロマドを除いて、何故かすべて林道の山側だけに暮らしていました。当時、大学の研究者の先生方からは「そんなはずはないでしょう。調査の仕方の問題で、しっかり調べてごらん下さい」と、言われました。



14：図 500m 地点から 400m 地点を見たところ。板当沢時代に陸生ホタルの生態研究をしやすい場所でした。左側の斜面で一度、オバボタルの大発生に遭遇したことがありました。朝 5 時から夕方 5 時まで成虫の数を観察し続け、12 時間で 100 匹以上になりました。こんな記録は他所では聞いたことがありません。



15：図 14：図の山側法面です。落ち葉が厚く降り積もって雑草が生えている地面の様子は 16 年前とそっくりな状況です。



16：図 400m 地点から見た 300m 地点の状況。変わりは見られません。



17：図 16：図の法面に芽を出したアオキです。5月の早朝には、こうした小さな若芽に羽化したばかりのカタモンミナミの成虫がじっと止まっているのがしばしば観察されたものです。



3 2025 年 4 月 30 日 夜間調査の結果

これならば、夜間に訪れたら、陸生ホタルの幼虫、中でも一番多く生息していたクロマド幼虫の見事な発光状況が観察できるのでは・・・と想いました。そこで4月30日に900m地点から北浅川合流点迄、午後7時30分から午後9時の1時間半をかけて歩きながら観察を行いました。当日の月齢は3日月でしたが、林道は真っ暗で、道幅がわずかに確認できたものの、灯り無しでは一步一步足もとを確認しながら歩かないと転倒しそうな暗さでした。クロマド幼虫の発光観察にはこれ以上無いと思われる条件でした。

しかし・・・発光する陸生ホタルの幼虫は一匹も見つかりませんでした。こんなに恵まれた状況でなぜ……。私は呆然として林道上に座り込んでしまいました。

どうやら板当沢の陸生ホタルは、この6年間で全て消滅してしまったようです。人間の目で見たまの状況からは想像できない様な変化が起きたのだと考えられます。

原因のひとつとして思い至るのは、災害復旧工事で通行していたトラックの排気ガスの影響です。しかし、法面の落ち葉の下に生活していた幼虫たちは、上部の林内に避難することが出来たはずですが。移動が不可能とは思えないのですが。

4 2025 年 5 月 5 日 日中調査の結果

今年は春先に気温の高い日が続いたので、幼虫の蛹化が早く始まるのではないかと考え、5月5日の日中に2時間、今回で最後のつもりで調査を行いました。林道上の700m地点から400m地点までの路肩を4ヶ所選んで調べてみました。以下その報告です。

18：図 1ヶ所目の調査地点です（黄色円）。



19：図 400m 地点。2～4ヶ所目の調査地点です。黄色線上の3箇所を選びました。



20：図 18：図の黄色円の所の状況 この落ち葉を割り箸で取り除きながら調べます。



21：図 20：図の調査後の状況。土壌生物では、体長 3mm 程のアリが 3 匹見つかっただけで、ミミズもムカデもホタルの幼虫も一匹も見つかりませんでした。小型の陸生貝類の姿も貝殻も見つかりませんでした。



22：図 19：図の黄色線上、2ヶ所目の調査地点。板当沢時代には、この時期でも落ち葉をはがすと陸生ホタルの幼虫が何匹も出てきた場所です。



23：図 22：図の調査後の状況。ホタルの幼虫は見つからず、他の土壌生物、ミミズもムカデも陸貝類もまったく見つかりませんでした。



24：図 3ヶ所目の調査地点です。



25：図 24：図の調査後の状況。土壌生物は見つからず、陸生貝類の貝殻もひとつも見つかりませんでした。



26：図 4ヶ所目の調査地点。ここからはハエが3匹と小型のアリが2匹、見つかりました。しかし、陸生ホタルの幼虫は、まったく見つかりませんでした。



5 まとめ

以上、老人の悪い癖で、くどくどと調査結果を未練がましく報告してきましたが、17年前には全国的にも稀な陸生ホタルが豊かに生息する林道として注目されたこの場所で、この状態とは、しかもその原因も全く分からないとは・・・情けないです。悲しいです。

最後に、この全長わずか2 km に満たない林道で、板当沢ホタル調査団の時代に生息が確認された陸生貝類のリストを再掲します。陸貝類だけでもこれだけの種が見つかったのです。ところが現在はその貝殻さえ1個も見つからないのです。

ヒダリマキマイマイ・ミスジマイマイ・ウスカワマイマイ・オオケマイマイ・ニッポンマイマイ・キヌビロウドマイマイ・カドコオオベソマイマイ・カサキビ・ムシオイガイ・ナミギセル・ヒカリギセル・トクサオカチョウジガイ・ヒメベッコウ・キビガイ・クリイロベッコウ・ハリマキビ・マルシタラガイ・オオウエキビ・ヒメカサキビ・ウラジロベッコウ・キヌビロウドマイマイ・コベソマイマイ・ウスカワマイマイ・オナジマイマイ・エンスイマイマイ・タワラガイ（26種）

あとがき

板当沢だけではなくありません。今年は我が家の庭にも異変が起きています。野鳥の姿が激減し、4月に入ってもまったく見かけない日が半数をこえていました。5月になりましたが、7日現在、野鳥を一度も見かけていません。ご近所の電線上に止まっているカラスやヤマバト、スズメ・シジュウカラの姿を見たこともありません。八王子だけの事情とは思えないのですが、会員の皆さん方の所ではいかがでしょうか。月報でも何回かとり上げた、アメリカのレイチェルカーソンの著作『沈黙の春』を思い出します。

あの本が書かれたのは1962年、今から63年も前のことです。私達もこれまで何もせずに過ごしてきたわけではありません。自然環境保全の問題に一生懸命取り組んできました。しかし、事態はここにきて急激に悪化してきているようです。